

IS—氷華

雪の日の猫鍋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

電脳探偵が過ごした時間にはもう一人いた

その者は電脳探偵達と共に世界を救った後、戦いに命を散らせた

その者が機械によって世界後変わり女尊男卑となった世界を見てどう過ごすのか…

目次

M a t e r i a l	設定	1
一話	私が消えた時	7
2話	目覚め	12
3話	新世界へようこそ	16
4話	騎士と罪…和解と今後	20
5話	入学	25
5話	変わる世界	30

Material | 設定

崩月 朧

性別 女性

享年 21歳 ↓ 転生時 9歳 ↓ 原作開始時 24歳

好物 鯛焼き 魚料理 うどん

篠ノ之束、織斑千冬などの友人達

アルファモンなどの家族

e t c

嫌物

女尊男卑に染まったもの

家族や友人を傷付けるもの

e t c

特技

暗殺 武術

e t c

異能

氷に関するものを司る（名前特に無し）

詳細

元の世界では裏をまとめる家の一つである崩月家に生まれたが物心が着く前に異能を持った朧を蔑んでいた分家の者に攫われ戦場へ送られた

本家は搜索したが見つかることは無かった

戦場において類まれなる鬼才を發揮し……如何に効率よく敵を排除し、生き残るかを突き詰め、極めていく

ある戦場で後の主となる者と出会い、戦うも負け、その者の付き人として過ごす

13歳の時、主の友人である神代エンタープライズの社長の元でEDENのベータテストとして参加し、デジタルワールドと現実世界、そしてイーターとの接触の原因である事件の原因を作ってしまう（巻き込まれる?）

その8年後にEDEN症候群とデジモン、イーターを巡るに参加し世界を救う
その2年後主を救うために戦い、命を落とした

デジヴァイス スマートフォン型端末

所持デジモン デイアナモン・オメガモンズワルト

ヴァルキリモン

・ マステイモン・

モン

・ オメガモン・ジエス

ン・カオスモン

・ カオスデュークモ

ン P M

ルフアモン

ドウフトモン

・デュナスモン e t c

専用機

【デウス・エクス・マキナ】

基本形態

薄く蒼みがかった銀色の騎士のような見た目

イメーჯ ランサー・アルトリアの鎧

単一能力

【ソウル・オブ・ナイツ】

絆を結んだデジモン達と一体化することにより

デジモン達の姿、武器、能力を得る

・インペリアルドラモ

・オフアニモン・ア

・ロードナイトモン・

・クレニアムモン

武器

【宵月】

刀身が黒い太刀

腰に装着されている

刀身にSEを流すことで切れ味を上げることが出来る

【パンドラ】

機械的な剣

刀身にSEを流すことでSEを吸収する斬撃を放つことができる

また、トリガーを引くことで形態を剣から銃へ、ロックを解除することで大剣へと変形させることが出来る

【グングニル】

銀色の大型槍

先にかけて赤みがかっている

イメージ アリアンロードの槍

【ユグドラシエル】

刀身に14のデジコードが刻まれている大剣

剣にデジモンの力を込めることでそれぞれのスキルを使用出来る

【アルテマ】

柄頭に鎖がついた短剣

短剣を射出し攻撃することや鎖を伸ばし相手を拘束することもできる

鎖の長さを変化させることができ、数百から数キロまで伸ばすことが出来る

【月影】

鎧の腰の部分に装着された刀郡

スカートのように装着されている

起動させることで操縦者の意思で操作できるソードビットとなる

【宵月】を抜く際、邪魔にならないように装着されている

織斑千冬との関係

小学校で出会った

元々話すことはなかったが朧が篠ノ乃流に興味を持ち、道場へ見学しに行った

その後、朧が道場へ通うようになり織斑千冬との試合を行ったことがきっかけで知り

合い、交友を深めていき、恋心を抱き始める

篠ノ之東との関係

お互いに興味を持っていなかったがこの時より交流のあった織斑千冬から朧につい

て聞き、興味を持った

自分や織斑千冬とは違う天才である朧を気に入り、

交友関係を持つようになった

織斑一夏との関係

織斑千冬による紹介で知り合う

その後、織斑一夏から話しかけられるので会話していき交友関係を深める

朧は織斑一夏の鈍感さに呆れており、密かに凰鈴音や篠ノ乃箒を応援している

篠ノ乃箒

道場へ来る朧に興味を持ち観察していた

朧の刀を振るう動きに魅了され憧れていく

その後は、朧にも教えを乞うようになる

たまたま小学校外で虐められていたところを朧に助けられて惚れていった

最近の悩みは篠ノ乃箒が織斑一夏のことを好きだと朧が勘違いしていること

一話―私が消えた時

日本―某所

「がっ…はっ…」

向かってくる敵をひたすら斬る…斬る…

何人斬ったのだろうか

腕を…足を…そして…首を

〇〇様が敗れてから毎日戦っている

向かってくる敵は元同僚や部下達だ

組織はいくつかの派閥があり〇〇様が纏めていたが敗れてからは下克上を狙った輩に毎日屋敷を襲撃されている

何故貴様らは〇〇様を襲う…!

〇〇様に助けられた者も襲っていている

仲間はもういない

全て奴らに殺されたからだ

〇〇様を護るのは私だけだ

だが…私ももう限界がきている

体は血が流れていないところはなく内蔵は大部分が機能していない

拳は潰れ左手は動かない

だが…そんなことは関係ない…自分が壊れるまで…否、壊れても戦い続けるだけだ
「ま…だ……終わらない…貴様らを…滅ぼすまでは…！」

右から銃弾が飛んでくる

それを動かない左手を盾にして防ぐ

正面からは刀を持った者が斬りかかってくる

それを右手に持つ小太刀でいなして

その者を盾に他の敵へ接近…首を斬る

心は冷たく…ただ敵を狩る機械のように…

「つ…！」

体に刀を突き立てられる…抜く時間は無い

そのまま刀を突き立てた敵を切り裂き

次へ飛びかかる…斬る…斬る…

確実に命を狩る…一人でも通すことは無い…

ババババババ

正面から射撃される

…避けられない…だが死ぬ訳にはいかない…!

私は銃弾を受けながらも前へ前へ進む

数分間撃たれ続ける

カチツ…

弾切れ…!

それを確認すると走り射撃する敵を殺し…

「あ…」

息が漏れるような声を出し

体が前へとゆっくりと倒れていく

まだ…敵がいる…終わってない…まだ…まだ…!

心は動いているのに体はもう動けない

お願い…動いて…まだ…終われない…!

必死に手を伸ばし…その思いも虚しく…私は倒れた…

薄れゆく意識の中見えたのは…倒れた私に迫る敵達と…

「朧…後は任せなさい…貴女はゆっくりと眠れ」

そう言う○○様の声…

ああ……〇〇様……駄目……

そして……私、『崩月 朧』は死んだ……

……思えば……長い人生だった

崩月家本家に生まれた私は異能を持っていたせいで宗家の者が戦場で戦死させようと送り込んだり

物心ついてからはずっと戦場で自分の名前と異能のみを持った状態で戦い……生き残った

初めは人を殺すことに対して本能的に恐怖していたのだから殺してからは恐怖は無くなり……心は凍ったかのように動かなくなった

その後、〇〇様と戦場で対峙し……負け、〇〇様に引き取られることになった

〇〇様は、こんな得体の知れない私に優しさを愛を注いでくれ、少しではあるが感情を知ることが出来た

私が13歳の頃、〇〇様の伝手で神代エンタープライズの新しい事業であるEDENのテストサーバーにベータテスターとして参加し、神代悠吾、その妹の神代悠子、白峰ノキア、真田アラタ、相羽アミと出会った

私以外の5人は記憶を失ってしまったが私は記憶処理を拒否し、自分たちの罪と向き合い続けた

その8年後、再びこの5人と再会するとは思わなかった

それにしてもまさか世界の存亡を掛けた戦いを行うとは思わなかった

この件が解決してからは〇〇様の元へ戻り組織の仕事をし、〇〇様が怪我で倒れてからの襲撃に私は命を散らせた

…まあ…この人生はとても充実し長く楽しむことができた…

2話—目覚め

?? 「君……………てくれ…起きてくれ」

…誰かの声が聞こえる…

聞いたことがあるような…

目を開ける

目の前には巨大な黒い…アルファ…モン…?

……アルファモン!?

私は目を見開き困惑していると

アルファモン 「ふふ…その様子だと私が何故ここにいるのか不思議なようだな」

隳 「本…物？」

アルファモン 「おや、君は私の偽物を見たことがあるの？」

それは興味深いな…どこであつたんだ？

それとも私が淹れた特製ブレンドを飲まないと私が本物だと分からないのか？ん？

……!?

隳 「っ…いい、いらないう…本物だと分かったからコーヒーはいらないう」

駄目だ：アルファモンが淹れたコーヒーだけはダメだ……！

あれは飲み物じゃないっ……甘いのに辛いか苦いのに苦しいものは飲み物なわけがない……！

アルファモン「つれないな、まあ私が本物だと分かってくれただけ良しとするか」
でも何故ここにいるんだろう……あの特別れたはずじゃ

気になったことを聞く

隴「なぜここにいるの？」

アルファモン「私がここにいる理由か……ふむ、君と共にいるためさ
私の助手君は新世界で生きているが君は死んでしまった

そのまま魂も消える所だった君をイグドラシルが違う世界へ送った
そこで私と数体のロイヤルナイツも共に君と歩むことにしたのさ」

……やはり私は○○様を守りきれずに……

私は悔しそうに表情を後悔に染める

アルファモン「私には君と彼女の関係は解らないがもう終わってしまったことだ
後ろばかりではなく前を向いて進むべきだ

あの時君達が過去を知った上で前に進んだように」

隴「……そう……だ……前に……進まない」と……

確かにアルファモンの言う通りかもしれない

まだ進むことは出来ないけど…前を向かないと…

でも…やはり…悔しい…苦しい…

私は顔を隠すようにアルファモンに抱きつく

そのまま声押し殺しながら静かに泣いた

アルファモン「……」

アルファモンは優しく私を安心させるように撫でてくれる

数分後

隴「ありがとう…」

私は少し恥ずかしそうに顔を赤くしながら

顔を上げた

こんな歳になって泣くなんて…

…：うう…：かなり恥ずかしい

アルファモン「ふふ…：気にしないでくれ

君も人間だ、泣くことはある

泣いたことで君が少しでも楽になったなら私は嬉しいよ」

臚 「…本当にありがとう…」

アルファモン 「この話はここまでにしようか

…他のロイヤルナイツは既に君の新しい世界へ移動している

あとは私と君が移動すればもう元の世界へは戻る事は出来ないだろう」

新しい世界…私の知らない…世界

3話—新世界へようこそ

フツと目が覚める

どうやらあの後意識を失ってしまっていたようだ

隳「ここは…家…？」

見慣れた天井だ

ということとは元の世界の家なのだろうか？

…私は死んで…別の世界へ来たはず…

アルファモン「やあ…起きたかい？」

隳「夢じゃない…？」

アルファモン「ああ、現実だ…ここは元の世界の君の家と同じものだ

まあ…家具は必要最低限しか無いが」

私の家を再現

どうやったのか気になるな

アルファモン「おっと…この姿では不審者だからな」

そう言うときアルファモンは光に包まれ—

―暮海 杏子の姿になった

アルファモン「ふふ、驚いたかい？」

懐かしい姿だ

あの時…アミが電腦探偵になった時からの思い出の姿だ

隴「驚くに決まってる…だってアルファモン

…いや…杏子さんとまた過ごせるなんて…嬉しい」

(アルファモン改め 杏子へ)

杏子「嬉しい…か…ふふ、喜んでもらえたようで何よりだ

他のデジモン達は今外出している

しばらくすれば帰ってくるはずだ」

他のデジモン達…それって

隴「人間の姿…？」

杏子「ああ、君の懐かしい姿の者もいる

それが良い意味なのか悪い意味なのかは君次第だが」

隴「…そう…あの杏子さん」

杏子「どうしたんだ？」

これから家族になるんだ…名前でも呼んでもらわないと…！

朧「そう…照れているの」

杏子「ふふっ、そうか」

先程のアルファモンの時とは違い白くて綺麗な手で撫でてくれる
優しく…何度も…なでなで…と

朧「ふあ…」

これは…凄い…癖になりそう

…気持ちいい…これ…いい

私の表情は気持ちよさそうに目を細めて撫でられることを堪能している

朧「あ…眠く…う…すう…すう」

「気持ちよさに身を任せているとどんどん心地の良い眠気に誘われ…私は寝てしまっ
た…」

杏子「おやすみ…朧君」

その後帰ってきた他のデジモン達に膝枕しながら撫でていることに嫉妬されてしま
うアルファモンであった…

4話—騎士と罪…和解と今後

目が覚める

杏子「おや、起きたのか？」

朝「はんはもう出来ているよ」

朝「はん…？」

朝…？

昨日この世界に来たのがお昼だったから…

あれ…杏子さんと話した後の記憶が無い…!?

隴「まさか…あのまま寝てしまっていた…!？」

嘘であつてほしい…お願い…

杏子「ああ、私の膝の上で、な」

うう…寝てしまっていたのか…って膝の上!?

隴「そ、そう…ありがとう…？」

恥ずかしいけどとりあえずお礼を言わないと

私はゆっくりと体を起こしベッドから降りる

窓からは朝日が差ししており気持ちのいい朝のようだ
グウウウ

私のお腹がなる

そういえば昨日何も食べてなかったかな

臃「す…すぐに行くからっ」

お腹の音を誤魔化すように大きな声で言うど慌てて着替える

杏子「了解だ、シャワーを浴びてから来るといい」

そう言つて杏子さんは私の部屋から出て階段を降りていく

数分後、私は服を着替えて1階へと降りていく

???「あらく久しぶりねえ」

階段を降りた私の耳に後ろから甘つたるい声で誰かが話しかけてくる

臃「ああ、おはようござーな、何故お前がここにいる!?!」

私の目の前には笑みを浮かべた岸部リエの姿が…!?

リエ「うふふ、ダメかしらあ? わたしがいたらあ…」

それともお…私の方がいいか? 人間よ」

岸部リエの声音が変わる

甘つたるい声から凜とした冷たさを感じる声へ

隴「ロードナイトモンですか」

私は半歩下がりにロードナイトモンを警戒する

リエ「そう警戒するな」

私も貴様に着いてきた者だ」

私に…？ということはアルファモ—いや、杏子さんが言っていたデジモン…

隴「何故、貴女が私に？」

気になる…あの人間を見下し、敵対していたロードナイトモンが何故…？

リエ「ふふつ、あの時私が貴様に負け、消えゆく中、

何故私は貴様に負けたのか…アルファモンと私で何が違うのかと考えていた

その結果、私と奴との違いは岸部リエという体の影響もあるのだろうが人と心から関わっていないかった事だと気づいた

だから私は貴様に着いてきたのだ」

…やっぱりロードナイトモンも私達の被害者だったんだ…

隴「…ごめんなさい…私達のせいで」

私は頭を下げた謝罪する

彼らデジモンは私達のせいで歪められたのだ

謝って済むことではないが謝罪はしなければならぬ

リエ「…気にするな

たとえ…イーターが来たのが貴様らのせいだとしても

私が罪無き人間を陥れ人生を歪めたのは私自身の意思だ

そこは貴様らがわるいのでは無い

あの時、私達を止めてくれたことに感謝をしなければならぬ

ありがとう」

隴「……うん…これから…よろしくね」

リエ「ああ、よろしく頼む…隴」

っ…名前を呼んでくれた…嬉しい

私達は手を握り合い、リビングへ歩んだ

その後シャワーを浴び、朝食を摂った後、私達は今までのこと、そしてこれからの事

を話した

私に着いてきたデジモン達は皆人間の姿になっていた

初めは驚いたがしばらくすれば慣れていった

その後杏子さんブレンドのコーヒーを飲み不思議な世界へ逝ってしまったのは余談

だ

隴「……あ…いあ。う……」

リエ「おいっ…戻って来いっ…」

必死な声と共に体を揺さぶられている

朧「く…とるー…いあ…っ…はっ」

正気に戻る

朧「あれ…？リエ…さん…？」

リエ「朧っ…良かった…」

朧「タコやイカは？」

リエ「夢だっ…忘れろっ」

そして私は学校へ通う……

5話―入学

「皆さん、本日は新しいお友達を紹介します！」

崩月さん、入ってください！」

私の名前が呼ばれる

その声に従って扉に手をかけ…ゆっくりと開け、中へ入る
先生と教団の前に立ち

「自己紹介をお願いね」

朧 「はい、私の名前は崩月 朧です

これからよろしくお願いします」

自己紹介をする

自己紹介を終えると教室内が少し騒がしくなる

中でも二人違う反応をする子がいた

1人は黒髪の凛とした少女だ

もう1人は紫？のような髪色のどこか興味のなさそうな少女だ

「みんな、静かにしてね！」

先生の声で静かになる

「では崩月さんは織斑さんの隣に座ってくださいね」

織斑：先程の黒髪の少女のようだ

臃「分かりました」

私は自分の席へ足を進め

周りの席の子に挨拶をする

臃「これからよろしくお願ひしますね、織斑さん」

織斑「ああ、よろしく頼む

私は織斑千冬だ

千冬、と呼んでくれ」

臃「分かりました」

軽く挨拶を済ませ席に座る

しばらくすれば鐘が鳴り、HRが終わった

その後は大変だった

授業と授業の間の時間になると男子や女子と多くの生徒が話しかけてきて休む暇も

なかった……

一週間が経ちました

この頃にはもう質問攻めされることも無くなり
友達といった友達もできることなく時間は流れていきました
ある日

私はこの地域の武術を学べる所を探しており

「篠ノ乃道場」と言うものがあると知りました

今日尋ねてみようと思います

ここですね

近所の方から頂いた地図によればこの大きなお宅のようです

私は呼び鈴を鳴らす

「…なんででしょうか」

出てきたのは男の方でした

私は道場が気になり来た旨を伝えると案内してくれました

なんとこの男性…師範の方のようです

道場へと案内される

道場には数人とその中には織斑千冬さんの姿もありました

あちらも私に気づき、目を見開いて驚いていましたがすぐに私から目を外しました

「君…何か武術をやっていたのかい？」

隴 「はい、家の武道を」

「家でやっているなら何故ここへ来たんだ？」

……どう答えましょうか

隴 「それは…私の家の流派だけでなく他の流派を学び、さらなる向上をするためです」

一応理由にはなっていると思います

「なるほど…分かった」

一度手合わせしてもらおう」

そう呼ばれこの方とするのかと思いましたが

なんと織斑千冬さんを行うようです

私たちは師範の言われるままに構え

私は全身の力を抜き左手を前に、右手を少し後ろに引き構えました

「両者構え…始め……！」

結果私が勝ちました

この世界に来る前からやっていたので当然です

負けたら…姉様や父になんと言われることか……

(少し遠い目をしている)

千冬「……強いな」

千冬さんは少し呼吸を整えながら話しかけてくる

隴「千冬さんもですよ」

踏み込みや技のかけ方など少し冷や冷やとした時もありました」

千冬「少し…か」

まだまだ私では届かないか」

隴「ずっとやってきましたからね」

負ける訳にはいきませんよ」

千冬「そうか」

お互いに微笑みながら会話を続け

本日は終わりました

その後も毎日道場へ通い、千冬さんと仲を深めていきました

篠ノ乃夫妻とも親しくなり時折夕食を頂くこともあります

篠ノ乃夫妻の娘である篠ノ之束とも親しくなり

学校や放課後も3人で良く過ごすようになりました

そして―時は経ち束さんの計画が始まります…

5話—変わる世界

数年経ち、私達は篠ノ之束の研究に巻き込まれるようにして協力した

篠ノ之束の妹の篠ノ乃箒、織斑千冬の弟である織斑一夏とも知り合い、仲良くなった
そして—篠ノ之束の研究は学会へ提出された

だが、他の研究者達は彼女の研究…つまり宇宙へ行くためのパワードスーツを「子供の空想」として否定し、嘲笑った

それを篠ノ之束本人から聞いた私は…彼女を励ましながら内心研究者達に静かな怒りを感じていた

何故彼女の研究が否定されなければならない？

何故…何故…

だから私は自棄になった彼女の次の計画—世界へISの有効性を知らしめる—to直前まで気づかなかった

世界をハッキングしてミサイルを発射し…それをISで防ぐという手段を当日聞かされるまでは…

隴「束！それをやってはダメだ！

ISは宇宙へ行くためのものなんだろう!?
だから強行手段に出るな!

それをしてしまったらISが戦争の道具になってしまおう!

東「おーちゃん…ごめんね

私にはこれしかないんだ!

そして…東は私の前から走り去った

私は追いかけたが…彼女を見つけることが出来なかつた

あの研究室には何も無く…既に別の場所へ移動していたようだ

隳「…何故…いやまだやれることはある

…ハッキングするなら少しでも被害を減らさない」と

私は家に戻り自分のデバイスを用いてハッキングを行う

杏子「隳、どうしたんだ?」

私はそう聞いてくる杏子さんに作業をしながら説明する

杏子「何っ?東君がそんなことを?…ふむ…私も手伝おう

他の者にも伝えておく」

隳「お願いします…」

私はいくつつかの国のサーバーにアクセスし

あと10分で発射されることを知り、可能な限り停止させ…遂に3分の2を止めることに成功した

残りにはロシア、ドイツ、アメリカのみ

だが…残り時間はあと2分…やりきってみせる…!

10

臃「まだ…!」

9

臃「あと少し…!」

空間に展開されたキーボードを操作し止めようとする

ファイアーウォールを突破し

あと少し…

8

プログラムの書き換えを…!

7

まだ…

6

5

4

3 プログラムを書き換える

2

1 プログラムが復旧される

1

隳「な…!？」

止められない…

0

そしてミサイルは発射された

隳「あ…あ…そんな…」

私はその場に膝をつき、絶望する

そんな私の方に手を置かれる

確認するとあの世界で共に戦ってきたディアナモンだった（銀髪、スレンダー、凛々

しい顔立ちの美女）

ディアナモン「まだ…終わってない

私の、いや私達の力を使えば止められる」

力…？

朧 「どういう…こと？」

ディアナモン 「手を伸ばして」

言われるままに彼女へ手を伸ばす

彼女も私へ手を伸ばし—手が触れ合うと

光が発せられる